



- NPO法人ホップ
障害者地域生活支援センター

代表理事 竹田 保

年末年始は寒波と大雪を避け、いつものように今年も自宅でのんびりと過ごした。飲みすぎたわけではないが、大晦日はいつもより早寝をし、元旦は6時過ぎに起床した。日の出までには少し間があり、いつものようにテレビのスイッチを入れると正月番組が始まっていた。やがて、ヘリコプターからの中継で朝日に輝くダイヤモンド富士の御来光を見ることもでき、幸先の良い初日の出と一年の始まりを迎えることができた。

コロナ感染が始まってから、歓送迎会、忘新年会など、多人数での会食もすべて取りやめ、業務も含めて公私ともに自粛と自重の日々を過ごしている。多少、感染者数が減少した昨年12月初旬に会議出席のために2年弱ぶりに東京に行ったが、出発前後のPCRと抗原検査を受けて陰性を確認、会食を避けてホテルで食事を済ませるなど自分なりに注意して過ごした。

昨年秋以降の感染者数の減少傾向に安堵したのもつかの間で、年末にはオミクロン株への置き換えによる影響からなのか一日の感染者数が1万人に迫る勢いとなっている。また、沖縄では感染者が1,800人を超えて諸外国並みの勢いだ。北海道内の感染者数も300人となり増加傾向の勢いが衰える気配が見えない。医療職、福祉職など社会基盤を支える側にもいずれ影響が出てくると思う。

沖縄では医療関係者が感染、濃厚接触により620人が業務から離れスタッフ不足による医療体制の縮小を余儀なくされている。今後、更に全国的に感染拡大が進めば、医療関係者にとどまらず、ヘルパーなどの介護職、福祉職、警察官、消防救急隊員など担い手不足から様々な社会基盤麻痺が起こるのではないかと不安を感じる。

過去の経験を活かして、感染者や濃厚接触者

への定期的なPCR検査実施による回復確認を行った上での待機期間短縮や家族介護による家庭内感染拡大、単身障害者対応、グループホーム入居者感染など関係者が率先して緊急連携体制の構築を進めることで安心感が提供され、今年こそは平穏な日常を過ごしたいと思う。

正月休みを終えて出社すると、事務所の窓から見える駐車場の雪山は、通り過ぎていく人の倍近く高く例年より気温が低い日が続いて雪の量も多い気がする。今年は各地で成人の祝いが行われている。コロナ禍のなかでの開催は難しいが、成人の祝いを心待ちにしてしている人も多いと思う。

私の関係する団体も、成人を祝う会を行った。20年という節目はそれぞれの20年を振り返るだけではなく、未来を考える節目なのかもしれない。

20年前の2002年に重度障がい者の共同住居自立ホーム24を開設し、重度障がい者の住まいと痰吸引・胃瘻などの医療ケアを公的補助なしで始めた。今の医ケアの走り、そして日中支援型GHの走りだったかもしれない。アフガニスタンから2名がホップの共同住宅で2週間ほど過ごした。イスラム教に合わせた食事や礼拝、アフガニスタン語しか話せないアフガン人と日本語しか話せない日本人。通訳なしでの来訪者とのコミュニケーションは唯一の顔芸。戸惑いの連続だったが、とりあえず体当たりでしのいだことが思い出される。なんとかなる、妙な自信を取得した。

この年、全世界から2,000人の障がい者が集まると聞き、札幌が変わる、北海道が変わる千載一遇のチャンス、何かが変わればと思った。宿泊先、交通手段など課題が山積していたが、大会期間に合わせて、タクシー事業者とNPOによるSTS実証実験が行われ、大会期間中の運行や実証実験の結果に対して高い評価を得、その後の道路交通法改正による福祉有償運送へと繋がった。

20年という節目は、不可能を可能にし、希望や夢を叶える期間だと思う。今年生まれる子たちに新成人が20年後の未来にどんな言葉を伝えるのだろうか。